



星野 夏海

### <感情>

幸運なことに私は健康体で生まれ、学校でいじめられることもなく、家族に愛されながら育った。それにもかかわらず私は贅沢なことに、毎日が憂鬱で、この世から溶けるように消えていく事を強く望んでいた。

「若いころは誰もがそんな悩みを抱えていた」「気にしすぎよ」周りの人たちは私にそう「アドバイス」すると、「さて、今日の夕食は何にしようかしら」と、席を立つのであった。



漫画を描くことが好きだった私は慈悲深いが内心理解の追い付いていない母と、自分の全能なる考えを押し付けてくる偉大なる父と、心と身体を呪われた祖母と曾祖母、そして最愛の妹と暮らしていた。

漫画のストーリー作りに役立っていた持ち前の想像力は妄想力も伴って、それはいまだに私を苦しめる特質となっている。

毎日の「若い悩み」は眠りについても悪夢となり金縛りを引き起こし心労のみ増すばかりの中、次第に「ある感情」が私の心を支配

するようになる。その感情とは「生きていることへの憎悪」である。

### <先生>

私は毎日自分が消えることと、（何も疑問を抱かずに生きている）人を殺すことを1日中考えることになる。悲しみや憎しみから突然現れる殺意。相手に死を突きつけることで得られる支配への憧れ。生きることは無意味である、と、宣教者にでもなったつもりで。。誰でもいいからいつか実行しようと、その思いは強くなっていった。そんな落ち込んだ私の魂が明日の光を手に入れることになったのは高校2年の時だ。

当時社会科の担当だった「先生」が修学旅行についての作文の課題を出したことがきっかけだ。特待生を目指していた私は点数目当てで作文を提出したのだが、なんとその作文に「先生」から返事が来たのであった。

こうして、時々手紙を書いて返事を待つという、未来への小さくて大きな希望を持つことができたのだった。

「先生」は私にとって外の世界を知る窓となり、きっと心のどこかで密かに他人との交流を求めている私は、高校卒業後も「先生」と交流し、生きることへのヒントを探していた。

現在は年に3回ほど行われる新潟への田植え等のイベント、その名も「みんなでごせ」に参加している。このイベントで私はようやく集団行動や協調性を学んだ気がする。

## <記憶>

私が集団行動ができなくなったのは小学校5年生の時、足の手術をして運動会に参加できなかったことと、学校で一人でこっそりと漫画を描き始めた頃だと記憶している。最も大きな原因は中学生になって初めての給食の時間だ。



人見知りが激しかった私は給食当番の時、本来は二人組みで運ぶスープが入った大きな食缶を一人で運ぶことになった。何度も床に置き、一息ついてはせせせと運んだ。無事運び終え、ようやく食事がありつけると思ったその時、廊下から男の怒り狂った叫び声が聞こえた。

その声は床に数滴溢れたスープを見つけて「誰がやった?! 出てこい!!」と喚いていた。私は自分でも迷惑なくらい正直者だったので、みんなが食事をする中、背中に視線と笑い声を感じながら掃除をしたのだった。悲しくて悔しくて怖くて、何よりも私はこの世界に一人ぼっちで、涙で濡れた床を何度も何度も拭いた。

そんな些細なことで、私は集団の中に存在することはできなくなり、より大衆を憎み、無力な自分を呪うようになった。恐怖に取り

憑かれた時は家でも学校でもトイレから出ることができず、何時間も籠っていた。壁や床の様を見つめ、ゆらゆらと自由に姿を変え絵になってゆく模様を小さなメモ帳に書き写して時間を過ごしていた。

## <現在>

専門学校を卒業後、居酒屋にアルバイトとして勤め5年目になる。バイトを通じて完全なる他人と関わりを持つようになる。

こんなメンタル故に最初は環境の変化からストレスを感じたり、組織の中で活動する息苦しさなど、辛いことの方が多かったが、経験を積み、仲間ができて乗り越えられるようになっていた。

悲しみや怒り、面白かったことを仲間と交流することで仕事上の悩みは抱え込むことは少なくなった。今では「憎悪」や「殺意」の多くはほとんど私の前に現れなくなった。しかし時々思い出したように「彼ら」は私に呼びかける。悪夢の中で、心の中で、私が一人の時に。

苦しむことはあるが自分を見失わないようにすることを、これからも生きていく中で探していくだろう。



《イラスト：筆者》